

よしだ ぞうたく
吉田 蔵澤(1722~1802)

南画家。松山藩士。松山城下(現、松山市)出身。風早郡や野間郡の代官となり、その在職中、善政を行い、信望を集めた。一方、絵を好み、20歳代に狩野派系の画を学ぶが、50歳代には南画の世界に向かう。南画当初は、画題も多様で、誠実な描法であるが、生硬な作風であった。やがて、70歳代に入り、変幻自在な境地を見せる墨竹画に至る。その完成度は「竹の蔵澤」と言われる程である。後に、正岡子規や夏目漱石も彼の墨竹をめで、句を詠んでいる。「蔵澤の竹も久しや庵の秋」(子規) / 「蔵澤の竹を得てより露の庵」(漱石)

略歴

享保7(1722)年	松山城下で松山藩士・吉田直良の長男として生まれる。
宝暦13(1763)年	風早郡の代官となる。
明和6(1769)年	風早・野間両郡代官となる。
安永元(1772)年	この頃「予章人蔵澤」の落款。「多功入道」、「筆硯精良人生一楽」の印章を使用
安永8(1779)年	この頃より落款が乱れ多様となる。
天明元(1781)年	持筒頭となり、中央藩政に参画
天明4(1784)年	禄を200石に加増され、者頭に昇進
天明8(1788)年	「酔桃館主人」の落款が、この頃より始まる。
寛政2(1790)年	この頃独自の画風を確立。自在の境地に達す。
寛政9(1797)年	雀印を後続者・大高坂南海に譲り、一時魚印を使用。その後、寅印を愛用
寛政10(1798)年	山田五郎兵衛事件に連座、役を免ぜられ隠居。この年、墨竹に激しい誇張、緊迫感に満ちた傑作が多く生まれている。
享和元(1801)年	この年の作品が最後となる。
享和2(1802)年2月27日	81歳で永眠。墓所は松山市本町の大法寺

〈関連図書〉

- ・石井南放『画集 蔵澤』 求龍堂 1976年
- ・石井南放「吉田蔵澤」『伊予の画人』 愛媛新聞社 1986年
- ・愛媛子どものための伝記刊行会『愛媛子どものための伝記 第17巻 吉田蔵沢・下村為山・三輪田米山』 愛媛県教育会 1988年
- ・矢野徹志『愛媛の近世画人列伝』 愛媛県文化振興財団 1996年

〈ゆかりのある場所〉…(P292, 113)

〈関連施設〉…愛媛県美術館

〒790-0007 愛媛県松山市堀之内 TEL: 089-932-0010